

思いがけないこの事態、それぞれに合わせてとはいえ、通所自粛の依頼なんて初めてのこと。「上町工房に行かなくていいってどういうこと?」「なんで誕生日会が中止?」「ガイヘルさんと電車乗れないの?」「なんでカラオケに行けないの?」「いつまで??」等々。イレギュラーだらけで見通しの持てないこの状況は、皆さんにとって、とても不安で不快だったはずです。

在宅支援を受けていただいた方には、絵画セットや日記帳・塗り絵、折り紙等を送ったり、工房で行っている毎朝の体操や午後のストレッチ、定番の歌等を職員で行ったDVDやフラのCDを作りご家庭で活用してもらったり、普段の受注作業を在宅で行っていただいたり、毎日電話でお話をする時間を作ってもらったり。少しでも過ぎしのメリハリになるよう、皆で様々な工夫をしながら、協力をいただきながらの日々でした。

しかし、こんなに納得がいかないような毎日でも、一生懸命に状況を受け止めようとしたり、応じようとしたりする姿は、まさに皆さんの強みである、邪気のないやさしさや寛容さなのではと改めて気づかされます。抑圧ではなく、この人がそう言うから仕方ない、合わせてみようかと思ってくくださるような、日頃からの和やかな関係性を築くことの大切さも改めて感じたところでした。

緊急事態宣言が解除されたとはいえ、感染症予防対策はまだまだ必要になりそうです。手洗いやアルコール消毒、マスク、換気、適切な距離、室内の消毒、ビニールシートの活用等々、引き続きやるべきことをやれる範囲でしっかりと行ってまいります。

とはいえ、推奨される「新しい生活様式」を皆が同じように、一律にできる訳ではない。私たちに合わせようとしてくれる皆さんに対して、私たちだって当たり前にもっと皆さんの分かり方、感じ方に合わせ工夫しなければいけない、『個々に応じて』という捉え方が抜け落ちないようにするには、と思います。皆さんにとって必要な、適切な支援、『障害特性への配慮』を軽んじてしまうことのないようにするにはいけないとも強く感じるところです。

さらには、『絶対に感染者を出さない』という意識はもちろん必要ですが、どうしても対策には限界があり、感染者が出た際の対策、利用者の他施設での受け入れや、職員の応援体制、地域との連携を整えておく必要性も感じています。

現在、2グループ制の通所の中、週末の一日の終わりに、リクエストを受け、マスクをしたまま距離を取りながら、皆で3曲程歌をうたう時間を作っています。ほんの5~10分のことなのですが、皆さんの生き生きとした姿、笑顔から、「あーやっぱり楽しいことをちゃんとやらなくては、そうだ、これが上町らしさだった!」という思いにさせてもらっています。感染予防のための行事の自粛が、『こんな時期なのだから、楽しむことも控えるべき』というような風潮にすり替わっていかないように。リスク回避のため、日々のプログラムや行事を安易に中止にするのではなく、どうやったら安全にできるかを考えていきたいと思っています。フラダンスやサルサダンス、歌、アートや体操、お誕生会、新たなやり方を検討して、また楽しみましょう!